

歯科口腔外科シリーズ

歯科口腔外科副部長 飯島響

顎関節症（がくかんせつしょう）

「欠伸をすると顎が痛い」、「口を開かない」、「口を開けるとカクカク音がする」こんな症状を経験された事はありませんか？

「顎関節痛」「開口障害」「関節雜音」は顎関節症の代表的な3症状であり、このうち一つ以上の症状があり、鑑別診断で他の疾患がない病態を「顎関節症」と診断します。成人の4割以上に顎関節の症状があるとの疫学調査も報告されており思い当たる節のある方も多いかもしれません。

(図1)



(図2)



(図3)



●顎関節症のメカニズム

顎関節は頭蓋骨にある凹みに下顎骨の関節突起が入り込み構成されています。人間の咬む力は強いので骨同士がじかに接触していると、徐々にすり減ります。それを防ぐために関節円板と呼ばれるコラーゲンから成る組織が介在し、下顎頭に運動することでクッションの役割を果たしています(図1)。この関節円板は、歯ぎしりや食い縛りなどの習癖、咬み合わせ不良、外傷、ストレスなどにより顎関節に過度の力が加わるとズレることができます(円板転位)。転位した円板は下顎頭の動きを障害し開口障害や疼痛の原因となります。また開閉口のたびに関節雜音が生じます(図2)。

●治療法

保存的な治療が主流で、疼痛に対しても鎮痛剤を一定期間内服するとともに、スプリントと呼ばれるマウスピースを就寝時に着用し咬合時の顎関節の負担を軽くします(図3)。また顎関節を支える咀しゃく筋に電気刺激を与えるなどの理学療法を行うこともあります。保存的治療で軽快しない場合は関節腔内を洗浄したり、外科的に癒着した円板を剥離する場合もあります。

●顎関節症に対するスタンス

顎関節症の多くは前述の保存的治療で軽快します。ただ、転位した円板が元に戻ることはまれで症状が再燃しやすいのも顎関節症の特徴の一つです。円板が転位していても、痛みがなく開閉口ができる状態であれば問題ないと割り切って、顎関節症とうまく付き合っていくのが大事になります。疼痛と開口障害が生じたら、歯科医院や病院歯科を受診していただき対症療法をおこなっていくのが顎関節症に対するスタンスです。また硬い食品の摂取を避けるなど顎関節に負担のかからない生活を心がけましょう。